

主体的能力を 高めるために

AP/FD YNU NEWS Letter

2015年2月 Vol.2

FD推進部門長 挨拶

キャリア支援部門長 挨拶

平成26年度(2014)公開授業開催報告

学士力を育てる大学へ

FD 推進部門長 上野 誠也

大学教育の多様化の中で、卒業生が共通して持つべき力として学士力がある。学士力には、単に豊富な知識を身に付けるだけでなく、チームワークに必要なコミュニケーション能力や総合的な学修経験で育まれる創造的思考力などが含まれている。これらはいわゆる学力とは明らかに異なる能力で

あり、社会を動かす21世紀型市民を育てる力となる。この学士力を育てる教育方法やその学修効果の測定方法が大学教育に求められている。従来の学力の育成とは異なる手法を新たに大学教育に組み込まなければならない。重要なのは、大学がどう学生を教育したかではなく、学生が大学でどう学

修したかである。学生の視点に立った教育プログラムで学生主体の授業が実施され、学生が自ら主体的に学ぶ能力が付いたが問われている。今、大学教育は学生主体へと改革を進めている。その成果が出るまでには時間がかかるが、学士力を持った学生が育つことに期待している。

就業力の涵養に向けて

キャリア支援部門長 上ノ山 周

就業力とは何でしょう。誰でも知っている企業に就職をさせ、その率が高いことをもって就業力が高いとは信じたくありません。自ら学びとり、自ら歩みゆく力を磨くことにより、自己が成し遂げたい業を鮮明にし、正しくその道に就く力こそ、就業力ではないかと私は考えます。大学は社会人として世に巣立つ直前の準備期間であり、自己を磨くには、この上ない最良の場です。学業の研鑽はもとより、国や世代を超えた人との出会いや恩師との邂逅を通じて、人間としてのバックボーンを形成する掛け替えのない期間となるはずです。さいわい横浜師範学校、横浜高等商業学校、横浜高等工業学校を前身

として発足した本学には、きら星のような栄達は何人も居られます。この4月からは、横浜国立大学校友会もいよいよ始動し、ますますチャンスは広がるでしょう。志を高くし、失敗を恐れないこと、もっと言えば、大学生の内に色々な失敗を経験しなさいと訴えたいぐらいです。ただそのためには、タフで明るさを失わないことが重要です。学生さんに訴える前にまず私達がそのようであるべきと考えます。特権の宝庫ともいべき学生時代を最大限活かし、完走してもらいたいと切に願います。そして私達教職員は、その良き伴走者であり続けたいと考えます。

2014年度 春学期公開授業が開催される

公開授業「化学EP実験I:導電性高分子の電解合成と物性評価」

跡部真人 教授

授業公開日：平成 26 年 7 月 3 日 (木)
対象学生：理工学部化学・生命系学科 3 年
授業形式：実験

授業時間：2 限～4 限
受講生数：17 名

授業の進め方

化学EP実験Iは化学EPの3年生の必修科目であり、72名の履修生を4グループ(A-1、A-2、B-3、B-4)編成にして、化学の諸分野にわたる12の実験テーマをローテーションして行っている。標題の実験については、各グループが1回ずつ履修しており、7月3日は4つ目のグループの17人を6班に分けて実施した。

実験内容は、1970年代に白川英樹博士により開発され、2000年のノーベル化学賞の対象となった導電性高分子を、学生自身が合成し、外部電圧に対する電気の伝わり易さや酸化状態、還元状態による色調の変化などを観察している。予め実験に関する理論および実験操作、ならびにレポートの作成方法、参考文献の記載された実験指針(12の実験テーマについてそれぞれ記載されたものをEPで作成)が学期の初めの全体オリエンテーションで配布され、それぞれの実験について

簡単に説明される。さらに、実験当日に実験の背景や実験操作について十分に時間をかけた説明が行われる。学生が理論的側面を理解して実験し、観察が十分できるように、時間配分に関しても配慮されていた。

授業の工夫

実験はノーベル化学賞の対象となった内容であるが、簡単な手作りの実験器具を用い、実験操作も容易である。また、水系を用いるなど安全性も考慮されており、博士課程前期1年のTA3名と博士研究員1名が実験の準備や、当日の指導補助について適切に役割を果たしていた。また、学生が実際に作成した物質を用いて色の変化を見みるなど、学生の興味を引くように工夫された実験内容であった。

担当教員から一言

実験を行うにあたっては、一つ一つの実験操作を行う意味を十分に考えてやってほしい。また、実験後の復

習も含めて導電性高分子の理論的側面をしっかりと理解し、実験で実際にそれらの理論に基づいた観察ができていないか、確認してほしい。レポートについては、理論的な背景、観察事項、実験結果、考察を記載するが、最も重要なことは、自分で理解し、自分の言葉で記述することだ、という事であった。



実験の説明をする跡部先生

公開授業「歴史文化概論」

松原宏之 准教授

授業公開日:平成26年7月3日(木)

対象学生:全学部1~4年

授業形式:講義

授業時間:3限

受講生数:約60名

授業の進め方

この授業では、歴史に解釈を加え、背景にある社会を含めて理解する歴史「学」を習得させるための授業を展開している。全15回の授業では、シンプルな歴史の読み解きから始め、学生自身が納得できるかどうかについて問いかけ、さらにそうした評価の妥当性を議論させることで、歴史学における歴史を理解するための方法を学ばせている。本公開授業では、19世紀の都市と公衆衛生を題材に、なじみのあるロジックによる歴史の読み解きから見いだされる学生自身による歴史的な解釈について、様々な資料を提示しながら解説していた。

授業では、はじめに、この授業科目で目指すことを学生に話し、当該授業で着目する内容へと導入した。授業では、板書とプロジェクタを併用して内容を解説し、具体的な歴史的な話題から疑問を提示し、そこから導かれる対立する意見について、語りかけたり、発問

を促したりすることで、授業内容への理解を深めていた。授業中には時折、この授業科目全体の目的についてふり返っており、当該授業の内容だけでなく、今後の授業で学生自身が考えるべき問題を意識させていた。これらのことを通じて、この授業では、受講する学生らに歴史学における方法論を具体的かつ体験的に学ばせている。

授業の工夫

学生自身で勝手に内面化された歴史的な解釈への気づきを促すため、授業構成が工夫されている。例えば、授業では当たり前と思っているロジックの説明から入り、語りかけながら、ヒントを与えながら、学生自身の考えを揺さぶり、異なる意見を生み出すきっかけを作っている。また、本公開授業とは別の時間ではあるが、学生同士によるディスカッションを取り入れて、様々な対立意見を出させることにより、内面化されたものへ疑問を抱く

ように促している。こうしたことで、全15回の授業を経た後、歴史に対する異なる意見を学生自身に気付かせるように意図された授業構成となっている。

担当教員から一言

学生は「なにかおかしい」と思っていることが多い。ステレオタイプなものの見方や考えから脱却できるように学生自身へ適切に働きかければ、新しいアイデアや別の社会のあり方についての意見が出て、授業が楽しいものになる。授業において、学生に語りかけるように話しているのは工夫の一つであり、学生の考えや思いを揺さぶって、そうした学生自身の意見を聞き出したいと考えている。



公開授業「ファイナンス」

鈴木雅貴 准教授

授業公開日:平成26年7月9日(水)

対象学生:経済学部 3~4年

授業形式:講義

授業時間:1限

受講生数:約50名

授業の進め方

この授業では、学部3~4年生向けのファイナンスの講義として、投資家の意思決定問題や資産価格理論、およびその他の関連する様々なトピックが扱われています。

授業のテキストは特に指定されておらず、毎回教員が用意した資料に沿って講義が行われます。この講義資料は、事前に授業支援システムにアップする形で学生に配布されており、学生が授業前に講義の概要をつかめるようになっています。

また成績評価については、授業中の課題3割、定期試験7割で行われます。この比率の通り、基本的には定期試験の結果が重視されていますが、講義期間中に学生に課題を解かせ、それを提出させることによって、学生の授業内容に対する理解度をチェックしています。

授業の工夫

まず特筆すべきは、板書による説明に重点が置かれている点です。その理由を先生にお尋ねしたところ、PowerPointのスライド等を利用して解説する方法もあるが、あえて手間のかかる板書をするので、講義を聴いている学生に考える時間を与えることが狙いとのことでした。確かに、学生の目線で見れば、未知の内容を自分なりに解釈し納得するには、こうした「間」が設けられていた方が、全体としては効率的に理解できるのかもしれませんが、

また、授業構成の面では、ファイナンスの基本的な事項が一通り網羅されている点が特徴です。これは一見当たり前のようですが、扱う事項を増やせば増やすほど、各項目の説明に割ける時間は少なくなります。先生によれば、この講義ではあえてファイナンスの様々なトピックに「広く浅く」触れることを重視しており、各項目の説

明は、学生が興味を持てば関連する参考書を読める程度にしているとのこと。これも学生の自発的な学習を促す工夫と言えます。

担当教員から一言

授業では、学生に対して、単に講義を聴いてわかったつもりになるのではなく、学んだ内容を自分で確かめてみることも重要であると強調しています。講義形式なので、どうしても学生が受動的になりがちですが、自分で手を動かして身に付けて知識こそが血肉となりますので、繰り返し復習の重要性を説いています。



板書で株価について解説する鈴木先生

公開授業「人的資源管理論I」

二神枝保 教授 平成25年度ベストティーチャー賞受賞

授業公開日:平成26年7月17日(木)

対象学生:経営学部2年~+他学部

授業形式:講義

授業時間:2限

受講生数:約500名

授業の進め方

授業のはじめに、パワーポイントのスライド資料(書き込み形式のもの)を学生に配布し、その後、スライドをもとに授業を進めていました。理論の説明には、理解しやすい例え話(プロ野球と高校野球の監督が果たす役割のちがいなど)を用いていました。指定された教科書を持参している学生もいましたが、これは、授業中に使うというよりは、予習・復習に役立ててもらうために学生にお薦めしたものだそうです。

二神先生は時おり受講している学生のそばを歩きながら問いかけ、学生にマイクをむけて解答させたり、学生に授業テーマと関連する心理テストを受けさせたりと、学生が主体的に参加し、インターアクティブ(双方向)となるような形式で授業を進めていました。

授業の終盤では、授業で学習した理論を用いて、学

生の身近な体験や事例を分析するミニテストを実施していました。これには、出席管理や授業内容の理解を深めるといった目的もあるとのことでした。

授業の工夫

二神先生にうかがったところ、受講する学生が主体的に授業に参加できるような工夫をしているとのことでした。たとえば、スライドを書き込み形式にしたり、学生同士でディスカッションする時間を設けたり、授業中に課題を解かせ、優秀な答えは次回の授業中に紹介して学生へのフィードバックを行うといったことが挙げられます。また、学生の理解を促進させるための工夫として、適宜、授業で解説した理論と身近な体験や事例を結びつけるようにしているとのことでした。

なお、当日はチャイムと同時に授業が終わりましたが、二神先生は授業をいくつかのブロックに切り分けて時

間管理をしているとのことでした。

担当教員から一言

学生に対しては、「授業の内容に高い関心や問題意識を持って受講してほしい。将来企業などで働くうえで授業で学んだことを役立ててほしい。」と期待を寄せていました。

また、新任教員の方々に対して、「学生が楽しみながら学べるような授業をしてほしい。そのためには、こちらが心から楽しんで授業をおこなうのが何より大切だ。」とのメッセージをいただきました。



当日の授業の様子

2014年度 秋学期公開授業が開催される



A 丁寧な板書で解説する邊先生

B 当日の授業風景

C

D 色の合成について説明をしている岡嶋先生

E 教える側も学生側も真剣

- A 公開授業「日本経済史」
- B 公開授業「簿記原理Ⅱ」
- C 公開授業「中等数学科教育法 C」
- D 公開授業「感覚知覚システム論」
- E 公開授業「土木史と技術者倫理」

公開授業「日本経済史」

邊英治 准教授

授業公開日:平成26年12月11日(木) 授業時間:3限
対象学生:経済学部 2～4年 受講生数:約80名
授業形式:講義

授業の進め方

この授業は、経済学部の2～4年生向けの日本経済史の講義であり、主に幕末から戦時期に至る日本経済の歴史が概説されています。

授業の進め方は、先生の板書にもとづく解説がメインです。教科書は指定されていますが、主に復習での利用に重点が置かれており、学生はまず、講義を通じて日本経済史の基本的な流れを理解することが求められています。

成績評価については、平常点(10%)、小テスト(40%)、定期試験(50%)と設定されています。定期試験の結果が最も重視されていますが、講義期間中に行われる小テストも大きな比重を占めており、これを通じて学生の授業内容に対する理解度の確認が図られています。

授業の工夫

授業の工夫としてまず挙げられるのは、洗練された板書のスタイルです。講義では、上下左右四面の黒板がフルに活用され、緻密に練り上げられた近代日本経済史の体系が展開されていきます。もちろん、ただ淡々と板書が続くわけではなく、並行して様々な歴史の「裏話」(人物伝・会社史・エピソード等)を盛り込んだ先生の解説が入ります。この「裏話」が、講義の絶妙なスパイスとなって、「表話」である日本経済史の体系をより一層引き立たせているという印象です。学生の視点から見れば、定式化された板書スタイルが採用されていることで、体系的な知識の獲得に安心感を持って臨めるでしょうし、一方で、アクセントとしての「裏話」が随所に配置されていることで、授業に対する関心を継続的に維持することができると考えられます。この両者のバランスが、本授業のポイントと見受けられました。

また、授業時に配布される資料も、講義に花を添える重要な要素です。資料には、関連する歴史的史料や統計、画像などが掲載されており、学生はこれらの歴史上の「生」の情報にもとづき、講義で語られた内容に関して史資料の面から再確認することができるようになっています。

担当教員から一言

経済学というと、数式を用いた理論や計量分析が中心というイメージがあるかと思いますが、この授業では、歴史的事実をつぶさに観察することを通じて、学生が日本経済の歴史についてリアリティを持って理解できるようになること、また歴史と現在との関連についてより明確に認識できるようになることを意図しています。

公開授業「簿記原理Ⅱ」

原俊雄 教授

授業公開日:平成26年12月12日(金) 授業時間:3限
対象学生:経営学部 1年 受講生数:約350名
授業形式:講義

授業の進め方

授業の初めに空欄付の演習問題のプリントとクリッカーと呼ばれる機材を学生に配布し、授業では、まずテキストの内容に沿ったパワーポイントのスライドを用いながら理論的な説明が行われました。原先生によると、「スライドの内容は教科書に沿っており、基本的な内容は教科書なしでも理解できるようにしているが、ときおり教科書のpdfファイルをスライドに写して説明することもある」とのことでした。理論的な説明の後に、パワーポイントから書画カメラに切り替えて、演習問題の解説をされていました。書画カメラには学生に配布したものと同じプリントが映し出され、原先生が空欄をペンで埋めながら解説が行われるため、下を向いている学生はほとんどいませんでした。

授業の最後には、クリッカーを用いて小テストが行われました。クリッカーを用いて学生が答えた解答は、リアルタイムで原先生のPC上で集計され、問題の正答率や、どの学生が一番早く正解したかなどがその場でスクリーンに公開され、学生もよい意味で盛り上がっていました。

また、e-learningシステムを用いた自学自習用の課題も出されており、それを成績の一部として加味されているとのことでした。

授業の工夫

原先生の授業は、パワーポイント、書画カメラ、クリッカー、e-learningシステムなど様々な機材を適宜使い分けることで、学生の学習効果が最大となるよう工夫されているようでした。たとえば、演習問題の解説などで書画カメラを使う理由について、原先生は「学生と同じ視点を作ることができる」、「パワーポイントとの切り替え時間がないため、説明と演習を連続して行うことができる」と説明されていました。また、クリッカーについても、「紙ベースで実施・集計して次週に解説してもよいが、リアルタイムで集計できるクリッカーのほうが、学生の反応も良く、効果も高い」とのことでした。

担当教員から一言

原先生は、「簿記原理は、会計学の基礎的授業であり、2年次以降の授業で必要となるものであるため、学生目線でわかりやすく、興味を持ってもらえるよう心掛けている」と授業に対する心構えを教えてくださいました。また、新任の先生方に対しては、「書画カメラやクリッカーなどは、非常に学習効果の高いツールであるため、機会があればぜひ使ってみてほしい」とおっしゃっていました。

公開授業「中等数学科教育法C」

両角達男 准教授

授業公開日:平成26年12月16日(火) 授業時間:4限
対象学生:教育人間科学部 3～4年 受講生数:約30名
授業形式:講義

授業の進め方

この授業では、小学校から中学校にかけての算数・数学という教科の系統性を概観させるとともに、生徒の理解の様相に焦点をあてることを通じて、中学校数学の学習内容や学習指導を理解させるための授業を展開している。本公開授業では、「折り紙を使って一組の三角定規をつくる」という実際に学校現場で行われている活動を題材にして、図形の論証(証明)導入期の学習指導のあり方について解説した。

授業では、まず導入として、小学校から中学校にかけての図形学習の流れを示し、どのような学習過程が意図されているのかを概説した。授業中には、折り紙を使った活動を行うとともに、グループで議論させながら中学生に図形の性質を理解させるための問題に取り組みせ、そうした活動が意図している学習内容の理解へと導いていた。まためでは、問題を解くための様々な方法から図形の性質への理解へつなげるための学習内容について、全体の流れの中での位置づけを意識させ、次回授業への導入を行った。これらのことを通じて、この授業では受講する学生に小学校とは異なる中学校での数学科の学習内容を直感的に習得させ、その教育法について学ばせていた。

授業の工夫

この授業では、将来教員になる学生が中学校における図形学習の内容を十分に理解した授業ができるよう、工夫されていた。例えば、担当教員が学校現場で行っていた活動を実際に中学生や高校生になったつもりで学生に取り組みさせた後、高次の視点から振り返ることで、その学習内容への理解や授業方法の取得へとつなげていた。また、提示した問題をグループで議論させながら解かせ、さらに白板を用いて全体に説明させることを通じて、学生同士で活発に議論させ、さらなる理解へと導いていた。こうしたことで、全15回の授業を経た後、学生自身が教科書や教材において意図されている背景を理解した上での図形学習の授業ができるようになるような授業内容となっている。

担当教員から一言

大学での学びを経て、学生はそれまでの学べ側から教える側になる。そのためには、単に教科書に書かれていることや例示されている教材を使うだけでは不十分であり、視点を変換して、それらに込められている意図や背景を理解する必要があると考える。また、教える側にとって、他分野・他教科を含めた様々な先生の授業を見ることが重要であると考えており、今後もそうした機会を通じてさらに学んでいきたいと思う。

公開授業「土木史と技術者倫理」

細田暁 准教授

授業公開日:平成26年12月16日(火) 授業時間:3限
対象学生:1年～(全学部) 受講生数:約220名
授業形式:講義

授業の進め方

いくつか顕著な特長があげられる。第一に、毎回授業の終盤にレポートが課される。学生それぞれが、必ず自分でタイトルを付け、真に感じたり考えたりしたことを講義終了時に提出する。採点されたレポートは翌週に返される。その繰り返しにより学生は自ら考えるようになり、発見があり、視野が広がっていくという。教員の側でも3ケタのレポートを毎週採点するのはたいへんだと思うが、毎回そのレポートを見るのが楽しみだという循環が生まれているという。毎回の評価の積み上げが学生の評価となる。第二は、本当はこれが最も重要なことと感じた点だが、教員の側で学生に合わせてはいない。むしろかなり率直に学生にメッセージを出し、達成すべきレベル等をはっきりと伝えている。かなりインパクトがある。第三はどちらかというと授業方法に近いが、この道の優れた教科書を使って毎週1章ずつ吟味・解説し掘り下げていく。その進め方もユニークで、最後の章からスタートしさかのぼっていく。

このように分解して説明すると、細田先生の授業の真の魅力が伝わらないおそれもあるのですが最後に補足すると、学生との距離がとても近い。インターネット等も必要なところで使い、学生と会話する場面もしばしばみられた。

授業の工夫

既に「進め方」の方でも書いてしまったので補足的に書く、各所で工夫が多くみられた。ある意味「スタイル」というか「型」のようなものが確立していて、それを成立させるための部品がいくつかあり、相互にうまくそれらが有機的に打ち出されていると感じた。例えば、教科書に沿って進めること、パワーポイントだけでなく、インターネット情報での確認、参考図書を紹介など。その紹介も単なる客観的解説ではなく、自らの読書経験や考えなども前面に出している。

しかし個々の工夫以前の教員側のモチベーションを強く感じた。

担当教員から一言

私は講義を、学生と教員を結ぶ現場の中でも最重要視しています。特に、この講義は教養科目でもあるため、多くの学科や学部の学生が受講します。にづくりの学問である土木工学、歴史、日本、その延長にある世界、読書等に真の興味を持ってもらうよう、私の持てる全力で学生と向かい合っています。生涯をかけて自分を成長させていくためのヒントを、学生それぞれがキャッチしてもらえればと願っています。

公開授業「感覚知覚システム論」

岡嶋克典 准教授

授業公開日:平成26年12月16日(水) 授業時間:3限
対象学生:理工学部 3年 受講生数:約40名
授業形式:講義

授業の進め方

この講義は、数理学EP、情報工学EPの学生を対象とした専門科目で、感覚知覚に関する基礎知識とその工学的応用を系統的に学習することを目的としている。12月16日の授業では、「3次元表色系と等色関数」について講義が行われた。

授業はパワーポイントを使って行われ、パワーポイントの内容は、配布資料として配布される。今回の授業では、3次元表色系など色に関する基礎的事項や測色法に関して説明された。パワーポイントは、20～30枚程度で構成され、図やイラスト、写真やグラフなどがふんだんに使われ、授業内容の本質が分かりやすく伝えられるように工夫されていた。授業の中では、簡単な実験も行われ、実践的な理解が得られるように配慮されている。今回の授業では、測色計を用いて学生の持ち物などの色を測定し、合成色の実験が行われた。また、学生が自分で簡単な実験やデータ処理ができるようになるよう、演習も行われる。演習は学生の理解度の確認にも用いられ、試験と合わせて成績の評価に用いられる。今回は、二色混合による合成色の計算を行う演習が行われ、学生同士でコミュニケーションしながら熱心に取り組んでいた。

授業の工夫

授業の導入では、日常生活の実例から説明が始まり、学生の興味を引きだしていた。話し方が明快で分かりやすく説明されていた。また、授業のキーポイントが、的確なキャッチフレーズで要約され、記憶に残りやすいように工夫されていた。感覚・知覚実験法、心理物理学、信号理論、統計学など、この講義でカバーされる広い分野の内容を理解しやすいように、授業の構成やパワーポイントの内容が工夫されていた。

担当教員から一言

本科目は理工系の学生にとって馴染みがない内容が多く含まれているため、数理や情報工学との関連性を示しながら、基礎から応用まで幅広くかつわかりやすくその有効性と基本概念を理解してもらえよう、説明方法やスライドに工夫を凝らしています。今回、「公開授業の振り返り」でいただいたご意見を基に、今後はより学生からの応答をリアルタイムに反映させながら進めるインタラクティブな授業にしていきたいと考えております。

公開授業「機械力学I」

中野健 准教授

授業公開日:平成26年12月18日(木) 授業時間:I限
対象学生:理工学部 2年 受講生数:63名
授業形式:講義

授業の進め方

機械力学Iは機械工学EPの2年生向け選択必修科目であり、Ame2クラスを対象として開講している。今回の講義では、バネ・質量系に減衰作用が加わる場合の運動方程式とその解の性質を論じた。要点をまとめた配布プリント(今回はA4用紙2枚、講義全体では8枚程度)を配布したうえで、黒板への板書を行いつつ解説を進めている。

主に基礎的な理解度を測るための小テストを10回程度行っている。小テストは採点したものを次の週に返却し、希望する学生には再提出(再チャレンジ)を認めている。

数式的な式の扱いと、それが表現している物理モデルの説明を行き来しつつ、丁寧な説明がなされていた。講義の要約として、それが表現している物理モデルの説明を行き来しつつ、丁寧な説明がなされていた。講義の要約として、それが表現している物理モデルの説明を行き来しつつ、丁寧な説明がなされていた。

授業の工夫

講義では、運動方程式およびその特性方程式の解を扱っているが、式展開における考え方や項のまとめ方についての方針をかなり詳しく説明し、何のために式を変形していくのかを強く意識付けている。また、数式を表すグラフの微妙な差異が重要な箇所では、その場で簡単なモデルと図を板書するなど、状況に応じて使い分けを行って非常に丁寧に講義をしている感がある。数式の展開でも板書の重複を厭わずに書き進める一方で、すでに講義で説明した箇所については少し飛ばすなど、時間をうまく使う工夫もあった。パラメーターの数値と、実際の現象との関係は把握しにくいことがあるが、講義ではプリントに用意した代表的パラメーターにおける運動軌跡を多数示しつつ、実用的な感覚やセンスを伝えようとする工夫もされていた。あとで伺ったところでは、講義メモをあえて作らず、学生に配布したプリントだけを見ながら講義をし、ライブ感を出すことで教員が考えている過程をあえて見せることを意識しておられるとのことであった。

担当教員から一言

振動現象が好きになってもらうにはどうしたらよいか?それを第一に考えて、授業の構成や語り口を決めています。授業を通して我々教員ができることは、あくまでも、学生たちに「正の初速」をつけることであると思っております。難しい事象を難しいまま教えるのは、ある意味で簡単なことですが、難しそうに見える事象をどれだけ簡単に見せることができるか、それこそが我々教員に最も求められている技量ではないかと思えます。

国際的な授業の質を 見つめながら—— Stare at the international class.

英語実習1LR

国際戦略推進機構 基盤教育部門 英語教育部

渡辺 雅仁教授

English Exercise 1LR (Listening & Reading)

Taught by Prof. Masahito Watanabe

In December 2014, Prof. Masahito Watanabe held an open lecture during his English Exercise 1LR (Listening & Reading) class for first-year students.

The class transitioned through several activities, including a review of grammar practice exercises assigned in the previous lesson, through the introduction of new material, and later a quiz to check mastery of the points. The organization was very familiar to the students, who transitioned seamlessly from checking homework to doing group work, and later, to focusing their attention on a lecture which introduced the day's new points.

The students were very much at ease interacting with the teacher and with each other. The way in which students consulted with both the teacher and their classmates about various grammar points without hesitation made it clear that the students were comfortable seeking any help they might need.

Observers of the class were interested in two aspects of the class in particular. First was the "small class" atmosphere, despite an enrollment of more than 40 students. The teacher knew every student by name and was clearly familiar with each one's individual needs. He gave personalized advice to students and the students were relaxed and not at all self-conscious, even when unsure of the correct answer.

The second point worth special note was the extremely smooth use of information technology during the class. This lesson's

listening activity took up a conversation between two students in the U.S. discussing an aspect of college life. When it became clear that some students were unfamiliar with one of the topics of the conversation, the teacher immediately turned and conducted an Internet search for photographs, displaying the search results in real time to the class on a large screen.

In this way, the class provided an excellent opportunity for observers to reflect upon the class atmosphere they create in their own courses, as well as how they might incorporate technology to enhance students' understanding of class topics.



新沼 雅代准教授

Chinese Exercise 2a

Taught by Assoc. Prof. Masayo Niinuma

In January 2015, Assoc. Prof. Masayo Niinuma opened her Chinese Exercise 2a class to observation by the YNU community. It was the final class of the term, enabling the observers to see for themselves the progress of the students over the academic year.

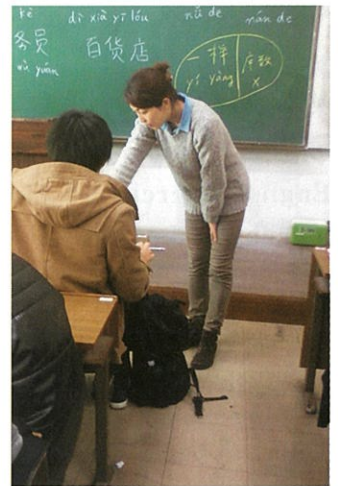
The class began with a review of grammar, which was followed by pairwork in which students took the roles of shoppers and store clerks. The students asked directions, confirmed prices, and answered survey questions about their "shopping experience." In this way they were able to review a wide variety of expressions that had been covered throughout the course.

The teacher also invited a YNU graduate student who is a native speaker of Chinese to interact with the students during the second half of the class. Each student was able to ask the visiting native Chinese speaker at least one question about her daily life—"Are you busy recently?" "What is your favorite food?" "Have you ever been to Tokyo Tower?"—and many students grinned from ear to ear when this visiting teacher understood their pronunciation and grammar and responded to them.

The comprehensive review of a wide variety of expressions followed by this interaction with a native speaker gave the students an excellent opportunity to realize for themselves how much they had mastered over their 10 months of study.

The class ended with some advice from both the native-speaking visitor and the teacher about how to study in the future, including tips on improving pronunciation, especially tones, and how to increase exposure to authentic input.

Reflecting on the class, Assoc. Prof. Niinuma commented, "The opportunity to interact with a native speaker increases learners' motivation. I also want them to approach language without being afraid of making mistakes."



オーラルコミュニケーションIIB

国際戦略推進機構 基盤教育部門 英語教育部

キャノン タラ教授

Oral Communication IIB

Taught by Prof. Tara Cannon

2015年1月26日木曜日、教育人間科学部開講科目、オーラルコミュニケーションIIBの授業を参観させていただきました。この科目は、教育人間科学部学校教育課程英語教育講座に所属する学生を中心に、将来、英語の教職免許取得を希望する学生を対象とした専門科目です。20名弱の学生が履修していました。

当日はそれぞれの学生がA4版の用紙に2から4枚程度で、地図、写真、イラスト、等発表に関連する資料を提示しつつ、5分程度でその内容を口頭で英語発表するものです。単なる英語のプレゼンテーションとは異なり、学校で教師としてどのように生徒にわかりやすく英語発表をするかを実践的に学ぶ授業です。

英語だけを継続して話す活動は反復練習が欠かせません。学生はひとりずつ、1メートル程度の間隔を空けて教室の壁の前に立たせ、一斉に発表を開始します。用意してきた発表が終わったら、また初めから繰り返します。

タラ先生はその間、学生の発表をひとつひとつ訪れ、コメントとアドバイスをを行います。クラス全体に対して有効と思われるアドバイスの場合、全体の活動を止め、タラ先生自身の発言と動作に注目させます。

インドの食文化について発表している学生がいます。インドの地図を用

意しています。その時、「いつでも日本との関係で説明する」とアドバイスされます。インドの地図から数メートル離れた地点を指さし、日本地図を両手で形作り、中国、インドネシア、インド、のように身振り、手振りとともに用意してきたインドの地図に辿りつきます。タラ先生のアクションはとても分かりやすく、間違いなく生徒の注意を惹きつけるものです。

先生は、発表する内容に応じて声の強弱、高低を変化させます。また、生徒から視線をそらさずに解説できるよう、「イナバウアー」するように、背中を逸らせて生徒を見つめます。教師として、実践的なモデルを授業の中でさまざまな機会をとらえて解説されます。

タラ先生の授業は、同じ英語教員としても極めて興味深いものでした。授業を参観して、自分の日々の授業のあり方についても、「改善しなくては」と反省しました。



英語実習1S

英語教育部

ジョン・ハモンド講師

English Exercise 1S (Speaking)

Taught by Lecturer Jon Hammond

In February 2015, Lecturer Jon Hammond opened his English Exercise 1S (Speaking) class to observation by the YNU community.

The class began with a review of exercises that had been assigned as homework, followed by a test of vocabulary. The students then moved into independent work in which they prepared to deliver several different types of oral presentations. Some students practiced by themselves while others worked together on group-based presentations.

During this course, each student was required to practice several types of presentation styles. On the day of the open class, one assignment was the presentation of a poem, in which the students focused on stress, timing, and rhythm. Another was a group presentation of an original dialogue, in which the students had to demonstrate voice control and natural use of gestures. A third was delivery

of an original speech, in which the students had to focus on eye contact, gestures, and dramatic pauses aimed at building interest among the listeners.

After some practice time in which the teacher gave one-on-one advice, students offered to present their work in front of the class. The students volunteered enthusiastically and spoke in front of the class without hesitation. The students were very receptive to the comments from the teacher towards their work and seemed to appreciate that the comments were well-tailored to their specific needs.



YNU
AP/FDニュースレター 2015年2月 2号(通号31号)

発行/2015年2月

編集/大学教育総合センター FD推進部

Mail/ynu-ap@ynu.ac.jp

HP/http://www.yap.ynu.ac.jp

※ご意見・ご感想がありましたら、上記宛までお寄せください。



大学教育再生加速プログラム